

別紙 3

厚生労働科学研究費補助金（認知症政策研究事業）

分担研究報告書

ケアファーム参加者・支援者が語った新しい認知症観

研究分担者 宇良 千秋 東京都健康長寿医療センター研究所 准主任研究員

研究要旨

【背景と目的】わが国の認知症施策は、従来の「保護・管理」の対象としての認知症観から、本人の意思と権利を尊重する「新しい認知症観」への転換期にある。こうした中、自然環境や農作業を活用するケアファームは、当事者が主体的に社会参加し、役割を担う場として注目されている。しかし、この新しい認知症観が、実際の現場において参加者や支援者にどのように受け止められ、どのような体験を通じて形成されているのかについては、いまだ十分な知見が得られていない。本研究では、認知機能障害をもつ高齢者を対象にしたケアファームの参加者・支援者に「新しい認知症観」についての考えを聴取し、その背景にどのような要素があるかを探索的に分析することを目的とした。

【方法】静岡県伊東市のケアファーム事業に参加する高齢者および支援者を対象に「新しい認知症観」に関するフォーカス・グループインタビューを実施し、主題分析を行った。

【結果】1) 参加者が語った新しい認知症観は、理念的に理解されるものではなく、ケアファームへの参加という「体験」を通じて実感されたものであった。2) 支援者が語った新しい認知症観は、教えられた知識ではなく、日々の実践の中で自然に形成されたものであった。

【考察】本研究の結果、農園での共同作業が新しい認知症観を育むプロセスが明らかとなった。農園という場での共同作業を通じて参加者と支援者の間に信頼関係が醸成され、それが「支援する側・される側」という分断を解消することにつながっている。こうした本人視点の実践の積み重ねが、結果として「新しい認知症観」の醸成に寄与していると考えられる。

【結論】ケアファームにおける新しい認知症観は、言葉による啓発よりも、具体的な活動や人間関係を通じた「体験」や「実践」によって、参加者・支援者双方の中に自然に形作られるものであることが示唆された。

A. 研究目的

わが国の認知症施策は、「認知症になっても希望を持って自分らしく暮らし続けることができる社会」の実現を目指し、従来の「保

護・管理」の対象としての認知症観から、本人の意思と権利を尊重する「新しい認知症観」への転換期にある¹⁾。こうした中、自然環境や農作業を活用する「ケアファーム」

は、当事者が主体的に社会参加し、役割を担う場として注目されている²⁾。しかし、この新しい認知症観が、実際の現場において参加者や支援者にどのように受け止められ、どのような体験を通じて形成されているのかについては、いまだ十分な知見が得られていない。本研究では、認知機能障害をもつ高齢者を対象にしたケアファームの参加者・支援者に「新しい認知症観」についての考えを聴取し、その背景にどのような要素があるかを探索的に分析することを目的とした。本研究は、認知機能障害をもつ高齢者を対象にしたケアファームの参加者・支援者に「新しい認知症観」についての考えを聴取し、その背景にどのような要素があるかを探索的に分析することを目的とした。

B. 研究方法

静岡県伊東市のケアファーム事業に参加する認知機能障害をもつ高齢者4名（以下、参加者）および、事業を運営するNPOスタッフ4名、市職員2名（以下、支援者）を対象とした。手法としてフォーカス・グループインタビューを採用し、前述の「新しい認知症観」の説明文を提示した上で、それに対して感じたことや関連するエピソードについて自由な語りを求めた。得られた逐語録は、Braun & Clarke³⁾のテーマ分析に基づき、主題分析を行った。

【倫理的配慮】

本研究は、東京都健康長寿医療センター倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号R25-051）。

C. 研究結果

分析の結果、参加者および支援者の語り

から以下の特徴が抽出された。

1) 参加者が語った新しい認知症観

新しい認知症観について理念的に理解するのではなく、ケアファームへの参加という体験を通して「認知症があっても人と関わり、役割を持ち、楽しむことができる」ことを実感しており、「来て経験しなければ分からない」という語りが複数の参加者から示された。

①「認知症になっても何もできなくなるわけではない」ことを体験知として語った。

Aさん（男性、80代）

「認知症になるのはね、やっぱりね、友達と仲間同士で話さなきゃ駄目。あと運動しなきゃ駄目」「話して運動する、それが一番いいですよ、認知症には」

Bさん（男性、80代）

「うちで母ちゃんの子分やってるだけじゃつまんねえけど、やっぱりみんなとこ行きゃね。くつついて歩くだけでもいいじゃん、楽しいもんね」

Cさん（女性、80代）

「ここへ来れば楽しくできる」「みんなと一緒にだっていう安心感」「共通した楽しみってのはね、一緒にできるってことよね」

②「理念ではなく、体験しないと分からない」と考えている。

Aさん（男性、80代）

「実際にね、本人が経験しなきゃ駄目」

「来て、経験しなきゃ駄目」

「話を、話を、ここはどうのこうの言っただけね、本人は分からないから」

Bさん（男性、80代）

「やっぱり来ると楽しいけどさ、やっぱり

ね、来なくちゃ分かんないからね」

「1 回来てみないと分かんないもんね、何も」

2) 支援者が語った新しい認知症観

理念として語られる前に、実践として積み重なってきたものである。教えられて身につけた考えではなく、一緒に作業し、関係を作り、時間を過ごす中で自然に形成されたものである（表 1 参照）。

- ① 日々の実践の中で共に時間を過ごすことで自然に培われた考えである。
- ② 認知症を特別視せず、個性や老化現象のひとつとして捉える視点である。
- ③ 本人が地域に出て役割を選択できることの重要性。
- ④ 「支援する／される」という二分法的な関係ではなく「一緒に場をつくる実践」として活動をとらえている。

D. 考察

本研究の結果、農園での共同作業が新しい認知症観を育むプロセスが明らかとなった。農園という場での共同作業を通じて参加者と支援者の間に信頼関係が醸成され、それが「支援する側・される側」という分断を解消することにつながっている。こうした本人視点の実践の積み重ねが、結果として「新しい認知症観」の醸成に寄与していると考えられる。

E. 結論

ケアファームにおける新しい認知症観は、言葉による啓発よりも、具体的な活動や人間関係を通じた「体験」や「実践」によって、参加者・支援者双方の中に自然に

形作られるものであることが示唆された。

F. 引用文献

- 1) 厚生労働省 HP 認知症施策推進基本計画 令和 6 年 12 月.
<https://www.mhlw.go.jp/content/001344090.pdf>
- 2) Ura C, Okamura T, Yamazaki S, Shimmei M, Torishima K, Eboshida A, Kawamuro Y. Rice farming care as a novel method of green care farm in East Asian context: an implementation research. BMC Geriatrics, 2021;21:237.
<https://doi.org/10.1186/s12877-021-02181-2>
- 3) Braun, V., & Clarke, V. (2006). Using thematic analysis in psychology. Qualitative Research in Psychology, 3(2), 77-101.

G. 研究発表

1. 論文発表
- 1) Chiaki Ura, Tsuyoshi Okamura, Sachiko Yamazaki, Akira Eboshida, Yu Kawamuro. Does implementing care farms in psychiatric hospitals prevent staff burnout?: A pragmatic, mixed-method pilot study. BMC Research Notes (In press)
- 2) 宇良千秋. 農園を活用した多世代共生社会構築の可能性. 老年社会科学, 47 (4)421-426, 2026.
2. 学会発表
- 1) 宇良千秋、山崎幸子、岡村毅 精神科病院における農園芸活動の多面的評価 老年社会学会第 67 回大会 2025. 6. 27~29 (学会賞受賞)

- | | |
|---|---|
| 2) 宇良千秋（招聘）シンポジウム「長寿を喜ぶ・喜ばれる多世代共生社会の実現を目指してー挑戦と展望ー」老年社会学会第 67 回大会 2025. 6. 27~29 | 1. 特許取得
該当なし |
| 3) Chiaki Ura, Tsuyoshi Okamura, Sachiko Yamazaki, Akira Eboshida, Yu Kawamuro. A mixed methods feasibility study on the multidimensional impact of care farms in psychiatric hospitals: potential for preventing staff burnout. IPA Congress 2025, Kanazawa, Japan, 2025. 9. 25~27 | 2. 実用新案登録
該当なし

3. その他
該当なし |

H. 知的財産権の出願・登録状況
(予定を含む.)

表 1 支援者が語った新しい認知症観の要素と語りの例

要素	発言者	語りの例
①日々の実践の中で体感的に形成されてきたもの	運営者A(男性)	「新しい認知症観って言葉が出だしたとき…別に自分たちがやってることと何ら変わりが無いというか」 「変わったって意識はないです。というのは、僕がそのケアファームをやる前からデイサービスでやってたことだし」
②認知症を特別視せず、個性や老化現象のひとつとして捉える	運営者A(男性)	「目の前の人を、アルツハイマー型でとか、介護度いくつでとか、全然あんまり気にしてなかった」 「何々さんで、昔こうして生きてきて、今こういうことが好きで…」
	運営者C(男性)	「認知症になった自分も含めて自分らしい」 「これも一つの個性だと思えば、一つの障害ですよ」 「一つの老化現象っちゃ老化現象」
	運営者D(男性)	「(以前は) 非常に重い病気っていうふうに捉えてました。ああんまりたくないな、かわいそうだなって感じてた」 「(今は) 病気じゃないんだよとか、みんなの見る目も全然違うんだよって」
	市担当者A(女性)	「やっぱり得意なことってできるんだっていう確認作業というか」
③本人が地域に出て役割を選択できる	運営者D(男性)	「出ても心配ない世の中だったら、出るんじゃないですか」
	運営者A(男性)	「草引きたかったらずっと草引いてるし、やりたくなきゃ座ってミカンむいてる」 「そういう自由度が保証されているのはすごく大事」
④「支援する／される」関係ではなく「一緒に場をつくる実践」	運営者A(男性)	「結局は人間関係をつくることだと思う」「回数を重ねてある程度お互いが分かってくるまでようやく発揮できる」